

石狩川と流域の発展

未開の原野であった北海道に、開拓の斧が振りおろされたのは、明治2年、北海道開拓使が設置されてからのことです。以来、西欧式の新農業技術や新生産方式の導入が積極的に図られ、開拓者は流域に集い、人々は安住の地を得たかに見えました。

しかし明治31年にこの新天地を襲った未曾有の大洪水は、人々の家屋、切り開かれたばかりの田畠、さらには尊い人命までも濁流の渦へと巻き込みました。

この大洪水を契機に、治水調査会が設けられ、石狩川の基本調査が実施されました。そして明治43年、10年におよぶ調査に基づき岡崎文吉博士が治水計画「石狩川治水計画調査報文」をまとめ、第一期北海道拓殖計画の一環として、石狩川治水事務所の開設とともに、北海道では初めて本格的な治水事業が始まりました。

石狩川をはじめ道内の大河川では流域に広大な泥炭地や湿地帯が広がっており、これを移住可能地とし、生産性の高い農耕地とするためには、河川水位を下げ、泥湿地帯の

や近代的な街へと発展してきました。

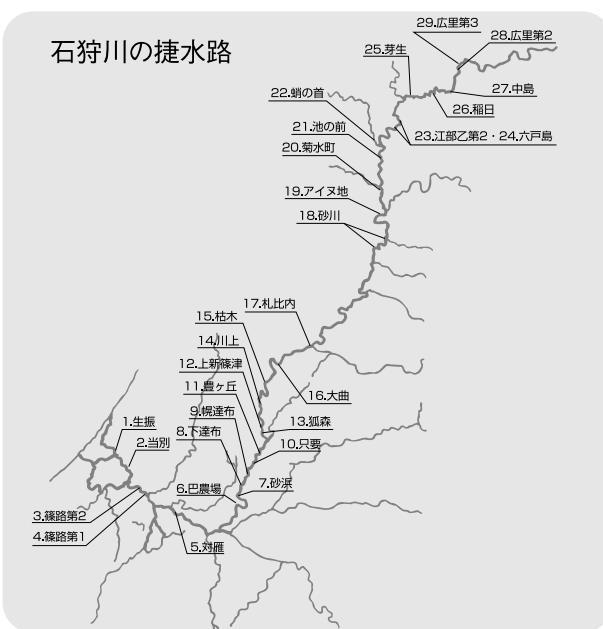
明治30年当時の石狩川流域の人口はおよそ44万人、昭和30年では184万人、現在(平成12年の国勢調査による)では309万人です。低平地における耕地面積は明治30年が15,500ha、昭和30年が97,900ha、現在が111,100haとなり、また低平地における市街地の面積は、明治30年が400ha、昭和30年が2,800ha、現在が17,100haとなっています。明治30年と今を比較すると、人口・耕地面積では7倍、市街地面積では実際に43倍にもなります。



昭和60年の石狩川流域土地利用



明治43年の石狩川流域土地利用



札幌のはじまり、大友堀



一ノ村新堀川・大友堀 明治4年
(北海道大学附属図書館蔵)



解体前の創成橋

創成川は慶応2年(1866)、幕吏の大友亀太郎が御手作場(官営農場)をつくるため、用水路として掘られたのがはじまりです。南3条から一直線に北6条に至り、東北にのびてフシコサツボロ川へ。大友堀は本府建設の物資を運ぶ大動脈でした。

大友堀の注ぎ口があった場には、現在「大友公園」があります。公園内には大友堀を復元し、子どもが遊びながら郷土の歴史を

学ぶことができます。隣り合う「札幌村郷土記念館」は、当時の札幌村元役場で、札幌村歴史研究会の3度にわたる大友堀発掘調査の内容や、大友堀に関する貴重な資料が展示されています。

大友亀太郎はわずか3カ月余りで札幌村の基礎を築きあげました。二宮尊徳の門下生で、「人の役に立つ開拓」を信条とした郷土が誇る報徳の人です。わずか4年でこの地を去りますが、その功績は語り継がれ、情熱は受け継がれています。

札幌本府が開かれると、

大量に物資を運ぶための輸送水路が必要になりました。明治3年、開拓使は北6条から琴似川との合流地点と、南3条から南7条間を開削。これが創成川の原形といわれています。前者は寺尾秀次郎が運送を請負つたことから寺尾堀、後者は吉田茂八が開削に従事したことから吉田堀と呼ばれます。

運河には平田舟などが行き交い、茨戸側から2番目の閘門付近には神社もありました。お祭りには相撲、芝居、映画などが盛大に催され、人が集う川の社交場でした。



大友亀太郎像

川からの恵みを受けて暮らす

恵庭市はその昔イザリブトと呼ばれ、千

歳川支流・漁川沿いに発展をしてきました。

国の指定史跡・カリンバ遺跡は縄文時代後期のもので、複数の人を埋葬した大型の墓からは、櫛・腕輪・勾玉や赤やオレンジ、ピンクに彩られた豪華な漆塗りの装身具が出土しています。そのほとんどが重要文化財に指定されています。そのほどんどが貴重なもので、当時の華やかな暮らしを垣間見ることができます。漁川が大昔から人々の暮らしを豊かにしてきた証しです。

江戸時代、このイザリブトにはアイヌ民族が住んでいました。アイヌは文字を残さなかつたため当時の恵庭の様子を知るには、和人の記録に頼るしかありません。交通の要衝であった恵庭には多くの人が通り、記録に残しています。寛政3年(1791)、最上徳内(ひだか)の『東蝦夷道中記』にはイザリの長・ヌカンランケのもと21人のアイヌ住民がいたと記述され、文化3年(1806)幕府目付・遠山金四郎(「遠山の金さん」で有名な北町奉行・遠山金四郎の父)は『東海参譚』に、闇の中



漁川

畠を見て「蝦夷人の いざりの里に たなづるもの 穂波よすとは 思ひかけきや」と詠んでいます。

明治2年、明治政府は場所制度を廃止し、全道を11国86郡に分け、島松川を境に恵庭を胆振国千歳郡に組み入れました。その後開拓の先達たちは漁川の恵みを受けながら、ときには漁川の水と鬪いながら、今日の恵庭を築いてきました。

漁川はアイヌ語で「イチャヤン」(サケやマスが卵を産むところ)から由来されています。そう遠くない昔、いまは宅地や農地になったところには、イトウが泳ぐ川やサケが上がってきた川がたくさんありました。漁川にはサケが今まで遡ります。

満々と水をたたえる支笏湖の伏流水のおかげで、ユカンボシ川や茂漁川など市内を流れれる川のほとんどが湧水を源とする清流です。最近、漁川の上流には絶滅危惧種指定のオショロコマや「ホンザリガニ」の棲息が確認されています。

悠久の大河・石狩川の水が枯れる事がない限り、漁川はこれからも多くの恵みを私たちに授けてくれることでしょう。

川を利する

● 岩見沢市 ● 川と歩んだ生活

利水はまず、人がそこに暮らす限り最初に飲料水から始まります。北村にとっての飲料水は、どこでも「良い水」というわけにはいきませんでした。北村地域の川沿いのほとんどが濃位泥炭土質層であつたために、有機物の酸化鉄分の含有が多く、「赤い水」でした。人命にこそ支障はありませんでしたが、「赤い水」は容易に人を寄せ付けませんでした。それは、赤い水を作り出している低湿地帯特有の泥炭地で不毛の地ということの方がむしろ問題だつたのですが……。

研究者は「旧美唄川に留水する水質は北村特有の濃位泥炭土質からしづらびり出る赤い水で濁度がなく、赤く見えるこの色度は水と微細粒物の完全融合に伴う結果で、薬品注入や濾過器などでは除去されることなくそのまま給水される」と述べています。

風呂の水も赤く、白いご飯も赤飯のようになり、洗濯には雨水を利用しなければならない状態でした。まして泥炭地からしみ出た油分の多いこの水は決して飲料水にはなりません。北村にとつて水を治めることは、

最大の関心事であり深刻な問題でした。

明治35年に「土地組合法」が制定され、次いで明治41年「水利組合法」の制定によって、石狩川からの農業用水の利用は本格的開発の段階に入りました。しかしその多くが、排水や灌漑など農業に関するものでした。開拓当初はともかく、時代が進むにつれて飲料用水の重要性が叫ばれました。

そして北村では昭和30年から、北村婦人団体や議会が北海道知事に陳情、説得の努力を重ねてきました。その効果が実り、翌31年に、旧美唄川古川を水源地としての簡易水道布設工事が認められ、同年水道管が布設されました。昭和32年に、北村浄水場が下美唄に完成して、12月にようやく待望の給水が開始されました。

こうして北村の水道がようやくできたのですが、前年31年に起つた大水害の痛手が大きかつたせいか、普及率は33.7%という低さでした。その後、当初は加入を見合させていた住民もしだいに加入し、さらに国からの補助も出されることになり、給水延長距離は実に140kmに及ぶ当時日本一の簡易水道となりました。



北村浄水場給水作業

昭和39年、砂浜簡易水道幌達布地区の拡張や北村簡易水道の需要者の増加にあわせた給水区域の拡張が行われて、北村簡易水道は「北村上水道」となりました。その後、豊正、美唄市、大曲地区の拡張や美唄市宮島沼・樺戸道路間への給水も実施され、さらに、美唄達布・中小屋・赤川の開拓地にむけての開拓水道も整備されていきました。

昭和39年、砂浜簡易水道幌達布地区の拡張

028

石狩川の木材流送

りゅうそう

明治21年、北海道炭鉱鐵道会社の空知線（岩見沢—砂川—歌志内）が開通したことによって、石狩川と鉄道の接点である砂川が木材流送の拠点として注目されるようになりました。

明治19年に樺戸、空知両集治監の囚人を動員して上川仮道路が建設され、新十津川、滝川などを中心に内地からの移住者が続々と入ってきましたが、開拓地で伐採された木材は輸送の手段が無いため、空しく焼き払われる状態でした。

北海道炭鉱鐵道は鉄道開通と共に明治43年頃まで、上流で伐採した木材を集材して筏に組み、砂川で陸揚げして需要地である小樽などに鉄道輸送しました。

木材の流送は会社が冬の間に山元で原木を買い付けて「ヤマゴ」に伐採させ、12~14尺に切断し、4面を削つて角にします。これを1本づつ馬に引かせるか、適当な小川の増水を利用するかして各地にあつた山元のアバに運び込みます。アバは、川の蛇行によつて渕になつてゐる適当な場所を選んで造つた川の中



木材流送網場(砂川市)

砂川では、最盛期の明治35年には4、5人の親方がいて、筏乗りの総数は700人といわれています。筏は普通横が24尺、縦12尺のものを1タキといい、6タキを2人1組で操り、砂川から江別までは12タキをまとめて流送しました。筏のシーズンが終わると、筏乗りの人々は、台車積みや農産物の小舟での運搬や砂利揚げ、冬は「ヤマゴ」や「ヤブ出し」（冬山造材）に行くことが多かつたようです。

しかし、木材の筏による流送は沿岸の開發が進むにしたがつて資源が少なくなつていき、出水のたびに土砂が流出し川底が浅くなつていく一方で、鉄道の延長と道路網の整備が進んだため、大正5年頃には全く姿を消しました。

の時木場で、規模によつて違いますが、川の両岸に8寸角を3~7本打ち込んで頑丈な基礎を作り、太い柱を立ててワイヤーを張り、この親綱から川の中に向けてヨメという少し細いワイヤーを下ろします。ヨメの先にはアバ角（14尺×1・2尺）という仕切り材を3本位結びつけて沈めたもので、川の中に木の壁を作ります。

こうして川の一部に半円形の貯木ダムを作り、木材の出し入れ口には遊び綱というア

川とくらし

石狩川、奈井江川では昔多くの魚が捕れ、和人が住む以前から先住民族の生活資源として、漁が行われていました。開拓当初には原始林に囲まれていたこれらの川には、サケ・マス・イトウ・ヤマベ・ヤツメウナギなどのほかチョウザメもいました。奈井江川や茶志内川にもサケがよくのぼり、手づかみで捕まえたといいます。その後炭鉱が開発されて水が汚れたり、移住者の増加で水温が上がるなどしてその数は次第に減少していきました。

昔は石狩川を丸木舟で、奈井江と浦臼うらうすを行き来していたそうですが、奈井江に多くの人が住むようになり、明治30年前後に渡船とせん場ばができたことで便利になりました。大風のときや氷が張るようになると、川止めになつて舟で渡ることができず、橋のある滻川を遠回りして浦臼まで行きました。

冬になると船頭さんは、1日も早く氷橋ひょうを架けます。秋に用意した柳の枝を氷の上に並べ、その上に雪を敷く、この繰り返しで前に進みます。夕方になると氷に穴を開けて水を汲み、これを掛けてしばれさせ橋を強

固にしていきます。何日かけてやつと対岸



奈井江大橋から上流を望む

昭和7年に奈井江を襲った洪水は被害が大きくなり、折りからの不景気と重なつて深刻なものでした。8月から9月にかけて毎日のよう雨が降つて、9回もの洪水がありました。そんなときでも子どもたちは遊ぶのに夢中でした。丸太を汲んで筏をつくり、海のような町の中を楽しそうに遊んでいました。

石狩川の川岸には、大きな柳やヤチダモの木が茂り、背丈を超すほどに伸びたイタドリが道に覆いかぶさっていました。道は日中でも薄暗く山鳩がボー、ボーと鳴いていました。川原に積もつた大きな石は家を建てるときの土台受けや基礎工事に、砂利は道路補修のためや工場・炭鉱の建設に使われ、運搬は農家のなどが請け負つて馬そりではこびました。

戦争が激しくなつた昭和18年頃から、農家で飼つている馬に軍事鍛錬たんれんが行われました。駆け足、並足などの訓練でしたが、たくさん馬が集まる適当な場所がないため、石狩川の広い川原が会場になりました。このようにみんなに親しまれた川原も昭和30年後半には川の流れが大きく変わり、昔の姿は消えてしましました。

自然の贈りもの氷橋

固まりにします。

橋梁の建設が技術的、経済的事情からまだあまり行われていなかった時代には、渡船による移動は交通上かなり重要な位置を占めていました。妹背牛においても開拓以来、橋が架けられるようになるまで、渡船は人々の生活において欠かせぬ存在でした。石狩川と雨竜川の大きな流れの上を、数え切れない人馬と物資が行き交いながら町の発展の基礎が築かれていきました。

しかし冬になると川は厚い氷に覆われ渡船の運行が出来なくなります。この間に渡船の代わりに町民の交通路を確保したのが氷橋です。氷橋を利用した期間は、その年の天候にもよりますが、12月中旬から翌年の2月末ころまででした。雪が溶け始めて、氷橋を利用するものが危険と判断すると、氷橋を取り壊して木造の渡船に切り替えました。氷橋は、秋から採取しておいた柳の枝をドベ雪(シャーベット状の雪)の上に横に並べ、雪をかけて踏み固めておき、シバレるときに水をまいて凍らせます。これを毎日、夕方から夜の気温が下がるとときに繰り返し、厚い氷の

こうして出来た氷橋は、厚さが約1mで、巾を2~3mにして川幅いっぱいに渡します。両岸を結ぶ白い橋です。冬は川も陸地も真っ白なので、橋の両脇に紅白の棒を立て、ロープを張りめぐらして目印にしました。このロープは、誤って氷橋から落ちた場合の安全網の役割もしていました。

渡船場の職員は冬の期間、客が氷橋を利用するので少しは楽になると思いますが、ところがそうはいきません。氷橋の手入れや、暖かな日は客が川に滑り落ちないように注意しなければなりません。

張り始めの寒いときはいいのですが、うららかな日が続き、氷が溶けだす時期が危険です。まわりの雪原が溶けても、厚い氷で作った氷橋だけが残ります。危険と判断したときは通行止めにするのですが、なかには無理に通る輩もいます。渡りきった途端に、ゴオッと音をたてて崩れ落ちてしまふこともあります。

妹背牛町と深川市音江の稻田地区に「須麻馬内渡船場」がありました。明治26年に私設渡船場として運営され、昭和33年に妹

背牛橋ができるまで開設されていました。

冬の期間は石狩川の他の渡船場と同じように、氷橋が作られました。氷橋を通るときも通行料金は徴収されます。

昭和33年の通行料金は大人2円、子ども1円、馬のみ3円、荷物を積んだ場合の馬は5円でした。

氷橋、なんとロマンチックで響きの良い言葉でしょう。しかし、馬そりや人々が行き交う幅2、3mの白い橋は、一歩間違えれば川に落ちるかもしれない危険と隣り合わせの橋でもありました。



石狩川河口付近の氷橋

夕張川の砂利採取

じやり さくしゆ



夕張川の砂利採取（昭和30年以前）



夕張川の砂利採取（昭和40年以前）

原始の夕張川（ユーパロ川）や由仁川（ユーニ川）は、サケやマスを獲つて生活していたアイヌの人たちにとって、恵みの川であり交通路でした。明治の中ごろまでは、支流のヤリキレナイ川やベリベツ川にも、サケやマスが上つてきていたそうです。しかし開発が進み炭鉱が開かれて、石炭を川で洗うようになってからは夕張川は黒い渦流に変わり、魚たちは

千歳川のほうへ逃げていきました。由仁町は、夕張川と生活を共にしてきましたが、中でも砂利とともに暮らしてきた人たちが大勢いました。

全道各地で砂利は産出されますが、なかでも由仁の砂利は、強度・粒度などが極めて良質の砂利でした。明治24年には、室蘭本線や夕張線の軌道道床に敷くため、大量の砂利が由仁から運ばされました。

砂利の大部は鉄道用と炭坑用であったため、由仁駅から夕張川

鉄橋まで砂利運搬用の岐線を敷いて砂利採取をしていました。旧村役場付近には、砂利採取に従事する家が、50～60戸くらい集まっていました。お

盆には一団となり、盆踊りに参加して日頃の美声を張り上げて、興を添えたようです。作業器具の「ジョレン」製作として、福士・長谷・万行・高坂という鍛冶屋さんが有名でした。ほかの砂利採取場から「福士のジョレン」と言って買い求めに来ることも多かつたそうです。

会社組織となり、その後合併して大きな砂利会社もできました。一家全員が同じ職場で働くこともできました。時々通る列車を眺め、手を休めて作業疲れをいやしていました。

第二次世界大戦に入つてからは、砂利の需要が増大して、昭和18年頃からは軍用の需要も一気に増えています。由仁駅から採取場の宇古川へ国鉄が岐線を敷設し、その作業には軍隊も出動したそうです。

現在の千歳飛行場は、由仁の砂利を利用して出来上がりました。

昭和40年頃からは、夕張川砂利協同組合が結成されました。夕張川筋の夕張、由仁、栗山、長沼、栗沢の市町村の砂利業者で組織されたものです。

由仁町は、夕張川と生活を共にしてきましたが、中でも砂利とともに暮らしてきた人たちが大勢いました。

盆には一団となり、盆踊りに参加して日頃の美声を張り上げて、興を添えたようです。作業器具の「ジョレン」製作として、福士・長谷・万行・高坂という鍛冶屋さんが有名でした。ほかの砂利採取場から「福士のジョレン」と言って買い求めに来ることも多かつたそうです。



夕張川ダムの上流部

夕張川のふるさと

「ユウバリは、箱館はこだてをさること百里、石狩より三十余里。石狩十三場所の中に属し、川の上流と下流の二つの地域に分かれている。また、この川は『エベツブト』から入ると左手の川で、その源の山々の西南は『ユウブツ』と『サル』の境になり、西北から北東にかけては『ボルムイ』『ピパイ』『ソラチ』の山に近い。また東は十勝の『サツナイ岳』とも接している。

そしてこの

『ユーバリ』

の山々は蝦夷えぞ地第二の大岳おほだけといえる。」

万延元年

(1860)

に探検家・

松浦武四郎

が刊行した
「夕張日誌」
の凡例にこ
のように夕

張を紹介しています。

現在地球上のある地点を示す場合、緯度と経度で表します。ちなみに夕張は、大まかに北緯43度・東經142度になりますが、昔は緯度も経度も当然ありません。場所を示す基準となつたのが「川」と「山」だったことが窺えます。

夕張岳は開拓の初め、数多くの砂金堀りが夕張川とその支流を目指し、夕張岳に入りましたが帰つてこない人もいてアイヌたちは魔物が住む山として恐れていたそうです。松浦武四郎も「夕張日誌」の中で「ユーバリノ

山々ハ役ノ小角・行基・弘法トイツタ聖サエソノ足跡ヲ残シテイナイ靈山デアル」と記しています。また昔、日高の漁師は沖漁での気象変化を知る(あてにする山)としていて、「ビダカ国サル郡の漁夫はユーバリ川の水源の山をしるべにして、それにガス(海霧)がかかつたらすぐ沖から逃げもどつた」と知里地名小辞典に書かれています。

「夕張川は源を石狩国(現北海道)の南東部に位せる夕張山系に発し、角田附近に出て、由仁・阿野呂の二支川、栗山駅附近に於て雨煙別川を入れて夕張太に至り千歳川と合して江別

川となり、更に四里半を流過し江別町の東端に於て石狩川に注いでいる。夕張川流域室蘭線栗山駅付近より上流川端に至る区間は本川上流乱流部に属し、水面勾配が急であつて五百分の一乃至千三百分の一の間を上下し流勢急で且つ河道の荒廃によつて洪水時に於ける河道面積広大であつて洪水量を迅速に超過せしむるを以て洪水の氾濫は比較的微少である。」と昭和6年に刊行された『北海道第一期拓殖計画事業報文』の中で夕張川の河状についての報告が載せられています。

ユーパロ(アイヌ語で鉱泉のわき出る所という意味)は夕張川の原名です。明治時代の夕張川は、ウグイなどが多く2、3時間も釣ると、数日分のおかずができたといいます。サケやマスも紅葉の始まる秋ごろ、先を三つ又にした銳いやすという道具で刺して獲つたり、野獸も多く雨の夜などキツネ、タヌキなどが軒下のきしたにきて、水を飲んだり鳴いたりしていたそうです。カワウソは、明治38年頃まで夕張川や支流の沿岸にたくさん棲んでいて、その毛皮は保温性が高く珍重うぶなまつされていたため捕獲みりわけを生業にしている人もいました。

空知川流域の生い立ち

●空知川全域

空知川は、北海道の背骨・日高山脈の北部、かなやま湖から10kmほど東の南富良野町落合を水源に、それぞれの流域で異なった表情を見せながら流下していきます。かなやま湖に注ぐ上流部は、金山ダムから北へ方向を変え、急峻な地形を縫つてトナシベツ川、西達布川を合流し流れは力強さを増していきます。やがて東大演习林の森林地帯に入るあたりから穏やかになり、富良野盆地へ出て、富良野市を貫流し、富良野川を合流して夕張山地へと向かいます。この地域はすべての川が落ち合うところで開拓時代「富良野太」と言われ、肥沃な土地で水田・畑作・畜産・林業が発達し、交通の拠点でもありました。

富良野盆地から夕張山地へ流下する險しい流れは、山間に入り狭隘する地形にぶつかり蛇行し滻となり、深い谷をつくります。特に大滻付近は難所中の難所といわれています。したが滻里ダムが水量を調節するようになりました。夕張山地から芦別、赤平と緩やかな勾配を下った空知川は滻川市内で石狩川に合流します。

空知川は、北海道の背骨・日高山脈の北部、かなやま湖から10kmほど東の南富良野町落合を水源に、それぞれの流域で異なった表情を見せながら流下していきます。かなやま湖に注ぐ上流部は、金山ダムから北へ方向を変え、急峻な地形を縫つてトナシベツ川、西達布川を合流し流れは力強さを増していきます。やがて東大演习林の森林地帯に入るあたりから穏やかになり、富良野盆地へ出て、富良野市を貫流し、富良野川を合流して夕張山地へと向かいます。この地域はすべての川が落ち合うところで開拓時代「富良野太」と言われ、肥沃な土地で水田・畑作・畜産・林業が発達し、交通の拠点でもありました。

滻里ダム



金山ダム



流域は肥沃な大地が広がり、流域の歴史は空知川の恵みに支えられてきました。開拓の時代から開墾されてきた流域は、豊かな穀倉地帯を形成し、農業が地域の重要な産業となっています。しかし、雪解け時期や降雨時期には過去に何度も洪水が発生して壊滅的被害をもたらしたこともありました。

空知川流域は明治の中頃から大正にかけて、造林による木材の输送が盛んに行われ、平地は水田や農地へと変貌し、上流部は林業・農業、中下流部は鉱業を中心に関況を呈してきました。その後悲惨な戦争を乗り越え、十勝岳の噴火や幾多の洪水と闘い、そして空知川の大きな恵みを受けながら新たな時代を切り開いてきました。

流域への入地は砂金堀りが最初ですが、明治に入り空知川流域の石炭などの地下資源が注目され、明治19年、空知太といわれた滻川を起点に上川道路が開削されます。屯田兵が入植して、村ができ、明治22年には北海道炭鉱鐵道会社が設立されて、室蘭線・空知線と次々に鉄道が敷かれたことで、開拓が一気に進んでいました。

人口も増加し、明治23年には滻川村が誕生し、24年に赤平、26年に芦別に入植しました。28年には中富良野町が開基し、30年に滻川村と奈江村が分割して歌志内村が設置され、富良野村が分村されました。

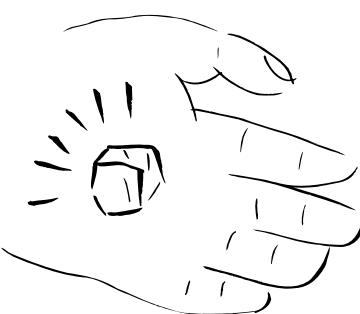
空知川の砂金堀



明治15年頃から、芦別周辺の空知川では盛んに砂金堀が行われていました。空知川の本流はもちろんのこと、細い支流までが砂金堀の対象となり、まるで穴でもあいたように、いたるところが掘られました。

砂金堀は今日、私たちが想像する以上に盛大なものだったらしいことが、芦別市内の各郷士たちが編集した郷土史のなかに数多く見ることができます。

中でも代表的な河川は、パンケホロナイ川、ベンケノンベ川であり、このことは記録にも残っていて、この三つの支流は「三大砂金川」とも言われるほど砂金が採れたようです。



明治22年、「雨宮敬次郎北海道砂金探検団」の一行が、空知川上流域の南富良野町金山の十梨別川で大々的に砂金堀を行つていました。砂金探検団の一行は太平洋の海岸から日高の沙留川をさかのぼり、占冠村の鶴川上流に出て、さらに峰を越えて、空知川支流の十梨別川に入つたのでした。しかし

この一行は、金山から下流には下ることはありませんでした。一方、芦別方面の砂金堀の人々は、石狩川をさかのぼり夕張山系から入山して空知川に入ったものとされていますが、下流域の芦別の砂金堀と上流域の金山の砂金堀とは、なぜか交流はなかつたようです。その理由は、アイヌ時代から交通の障害であった「空知大滝」があつたためと考えられています。

三大砂金川の中でも最も産額が大きかつたオチノンベ川では、滝川方面から20数名の一団が入り、重さ1個24匁(約90g)もあるという大きな砂金も採取されたことがあります。

明治22年頃から、空知川の上流・下流で砂

金堀の全盛時代を迎えた後は減っていましたが、昭和の初めに至るまで個人によって砂金の採取が行われていたそうです。

また、華やかな砂金堀の全盛時代を支えたのは、どうやら移住者ではなかつたと推測されます。それは、小屋掛けした小屋には雪が降る季節になると、いつしか誰もいなくなつたからです。

上川盆地の「熊」に関する河川名

石狩川及びその支流には、多くの「熊」に関する河川名があります。一般的に、アイヌ語の河川名は西部（札幌に近い地域）に多く、和名の河川名は、東部（大雪山、十勝岳方面）に多いことがわかっています。

これは、入植地^{（いりゅうち）}が奥地へ進むに従い、ヒグマの生活圏に進入することで、人とヒグマの接触が多くなり、「熊」のつく河川名が生まれることになったと思われます。

上川地方には、アイヌの大きな集落が数

多くあり、彼らは「熊」を山の神（ヌブリ）ロカムイ^{（ロカムイ）}と呼んで尊敬していました。

上川盆地における「熊」のつく河川名は、いくつかに分けることができます。

A—熊ノ沢

●旭川市伊納地区。JR伊納駅の北方750mにある石狩川右岸の小沢。アイヌ語名は「松浦國」によると、「ヌブ・バ・オマ・ナイ（野・の上手に・入つていく・川）」です。大正時代まで伊納地区は、このアイヌ語から「ノッパマナイ」と呼ばれていました。



熊の沢ダム

- 当麻町開明地区。当麻川中流部右岸にある沢。当麻町史によると、大正10年頃、和人の釣り人がアイヌ一家族から、「上流に熊を獲るぶし矢が仕掛けたので危険だから行くな」と言われたという話が伝えられています。
- 旭川市東旭川町米飯瑞穂地区。米飯川上流部の右岸にある沢。「冷泉沢」の別名があり、わかし湯の温泉がありました。道立「二十一世紀の森」はこの奥にあります。
- 美瑛町中宇莫別地区。宇莫別川中流部の右岸にある沢。この沢から、辺別川流域の俵真布地区へ通ずる道路があります。
- 愛別町徳星地区。マタルクシユ愛別川の右岸にある小沢。主要道路「下川・愛別線」（道々101号線）は、この沢に沿ってのぼり、「於鬼頭トンネル」を越え、朝日町へ通する。
- 大雪山国立公園「裾合平」西方の東川町内。忠別川の右岸支流のピウケナイ沢へ海拔1,000m付近で合流する沢。開拓入植者とは無関係で、登山者との関係で命名されたものと考えられます。

ある沢。北海道電力・江釣ダムの上流側に沢口があります。ニジマス釣りの穴場といわれています。

C—その他

●クマノ沢——層雲峠入口の上川町真勲別地区。石狩川上流部左岸にある沢。

●熊沢川——美瑛町置杵牛中央地区。置杵牛川中流部右岸にある小沢。

●熊見川——美瑛町新星第四地区。美馬牛川中流部右岸にある沢で、海拔259mの「熊見山」の麓を流れている。戦前、この地は軍用地で、演習中、望遠鏡に熊が徘徊するのが見えたことから命名されました。